

【活動報告】

東京都公文書館 企画展示

「子どもの見た戦争 手紙が語る学童疎開」

東京都公文書館 史料編さん係
 専門員 長谷川 伶

1 開催の経緯

平成26年（2014）6月、学童疎開を体験された方から学童疎開関係資料の寄贈について当館へ打診があった。館内で打ち合わせを行った後に受け入れを決定し、手紙本文の内容情報を記載した目録を作成した。

平成26年が学童疎開から70年の節目にあたることに加え、手紙が学童疎開と太平洋戦争を子どもの目線でとらえた貴重な資料であること、また寄贈者の在籍していた国民学校（赤松国民学校）^{*1}が東京都内にあり、当館所蔵の公文書にもその名称が記載されていることから、寄贈された手紙と公文書を組み合わせ、東京都の実施した学童疎開について紹介する展示を8月11日より9月12日にかけて企画・開催することとなった。

2 寄贈された資料の概要

今回寄贈された資料は、疎開先から家族に宛てて書いた手紙を中心にして同時代の書簡類や絵、絵葉書など印刷物を含め総計55点である。

手紙は、学童疎開を経験した香河郁世氏（旧姓：田中）^{*2}が集団疎開先である静岡県志太郡島田町敬信寺から家族に書き送ったものが中心となっている。香河郁世氏は、学童疎開をした当時、赤松国民学校5年生で、昭和19年（1944）9月に敬信寺へ同級生と共に移動した（男子児童は同じく静岡県の天徳寺に集団疎開）。戦局の悪化に伴って同学校は岩手県盛岡市の東願寺へ再疎開したが、香河氏は兵庫県伊丹市の祖母宅へ縁故疎開した後、神奈川県へ移動して家族と同居しているため、手紙は静岡県志太郡島田町および縁故疎開先の伊丹市から差し出されたものである。多くの手紙は父親である田中要人^{*3}宛となってい



展示チラシ

る。

また、香河氏の妹である渡辺葉子氏、姉の長澤枢美葉氏からも手元に保存されていた手紙類や、当時の絵などをご寄贈頂いた。一連の資料の中には、疎開先で交流のあった海軍航空隊の軍人から送られた手紙もあり、軍隊と地域との関わりを考察する上でも貴重なものが含まれている。



寄贈された資料（部分）

3 展示構成と内容

本展は、学童疎開の全容を紹介する内容ではなく、基軸はあくまでも「児童の手紙」に設定した。しかし、展示構成として学童疎開から始めるのは唐突でもあり、太平洋戦争の概要や都市防空の歴史について紹介し、なぜ疎開が実施されることになったのか、その背景をやや詳しく説明することとした。

また、学童疎開を扱う部分では、疎開体験者である香河郁世氏からの聞き取りを反映させて解説パネル等を作成し、展示タイトル通り「子どもの見た戦争」というテーマを前面に押し出した内容になるよう心掛けた。



展示風景 1

各章の構成は以下の通りである。

第一章：太平洋戦争のはじまり

太平洋戦争の概要に触れるとともに、開戦を報じる昭和16年（1941）12月8日の新聞の実物や、太平洋戦争の戦場となったアジア・太平洋地域の地図を展示した。

第二章：防空体制の整備と空襲

第一次世界大戦において航空機が兵器として用いられて以来、防空体制の強化が議論されはじめ、東京でも防空演習が実施されていった様子を防空演習記念絵葉書などにより紹介した。また、太平洋戦争の後半に空襲が現実のものとなった際に各家庭に配布された防空意識啓発のための冊子や、家庭に常備された防空用防毒面なども展示した。



第三章-1：学童疎開のはじまり

学童疎開実施の背景を概観し、同時に赤松国民学校の歴史を関連資料（入学式や疎開先での写真、通知表など）と共に紹介した。

第三章-2：子どもの見た戦争

寄贈者である香河郁世氏が体験した学童疎開の生活に触れながら、実際に疎開先から家族に宛てて差し出した手紙を展示した。母親に対し、食べ物を「ないしょ」で送ってくれるように依頼する紙片や、B29による空襲について書き綴った手紙など、疎開先での生活を象徴的に示し、また戦時下の様子をよく伝えるものを選定した。

また、手紙の原寸大レプリカを作成し、来館者が実際に手に取って手紙を読めるように工夫を行った。

第四章：当館所蔵の学童疎開関係資料

当館が所蔵する学童疎開関係文書は、全冊の翻刻が平成8年（1996）に『東京都の学童疎開』として刊行されている。本展では数冊ある簿冊のうち、2冊を選定し学童疎開の実施を決定した際の文書や、赤松国民学校の再疎開について示した文書を開いて展示した。政策決定側の文書と、その政策の“受け手”になった児童の手紙を対応させる形での展示である。

関連展示

赤松国民学校の男子児童が集団疎開した天徳寺の写真や美術教師が訪れた際に描いたスケッチなどを疎開体験者からの資料提供によりパネルで紹介した。また関連書籍コーナーを設け、展示では紹介しきれなかった学童疎開に関する諸情報を入手できるようにした。



展示風景 2

左側にあるのが手紙のレプリカコーナー

4 配布資料と展示の工夫

展示会場では、2種類のリーフレットを準備して配布を行った。1つは一般用、もう1つは子ども用である。前者にはパネルで掲示した各章の解説をそのまま掲載し、後者は章の内容に合わせてQ & A方式で太平洋戦争や学童疎開について解説する内容とした。子ども向けリーフレットには、疎開地からの手紙の画像および翻刻を掲載して「読んで感じたことを話し合ってみましょう」との文言を入れた。子ども向けリーフレットを準備したのは、開催時期が夏休み期間中であったため、自由研究の素材として展示を活用してもらいたいというねらいによる（実際、親子連れで多くの小中学生が来館し、本展を自由研究の題材として取材した）。

展示会場では、資料ごとに付したキャプションとは別個に、「見どころポイント」と名付けた子ども向けのキャプションを複数個用意して興味を惹くと共に、展示の理解を助ける役割を持たせた。

また、ケース内に収められた状態では手紙をじっくり読むことが困難であるため、「たいけんコーナー 手紙をよんでみよう！」を設けた。ここでは原寸大の手紙の複製（4種）を実際に手に取って読むことができるようにした結果、多くの来場者がここで立ち止まって手紙を読み、その感想はアンケートにも反映された。

5 メディア報道について

本展および資料寄贈者に関して多くのメディア取材があった。一覧は表の通りである。

掲載・放映月日	媒体名	掲載・放映枠	内 容
8月	テレビ東京	ワールドビジネスサテライト	疎開展をきっかけにして70年ぶりに集合したかつての疎開児童たちの様子と展示の紹介
8月15日	讀賣新聞	東京版	展示内容の紹介
8月16日	TBS	Nスタ（学童疎開の小特集）	香河郁世さん、渡辺葉子さんの疎開、戦争体験のインタビューおよび手紙の内容紹介と展示担当者による解説など
8月16日	TOKYO MX	学童疎開特集	手紙の内容紹介および展示日程の告知など
8月19日	毎日新聞	都内版	香河郁世氏の学童疎開体験インタビューおよび展示されている手紙の紹介
8月26日	二子玉川経済新聞	—————	展示構成や展示品、担当者のコメントを写真と共に紹介
9月1日	毎日新聞	記者のひとりごと	香河郁世氏へのインタビューを通じて得た記者の感想
9月	静岡新聞	—————	地元の寺院へ東京から来た児童がいたことを説明し、関連展示が開催されたことを紹介

計8社（新聞5社、テレビ3社）が報道を行い、多くの方がメディア報道をきっかけとして来館したことから、報道による情報拡散の効果は高かったといえる。

プレス発表を行ったため各メディアからの取材申し込みがあったが、実際の報道内容は様々であった。TBSは特集枠を組み、手紙の内容、寄贈者の証言映像、展示担当者の説明、来館者インタビューなどで番組を構成した。

TOKYO MXは、他機関が開催した学童疎開関連の展示取材と対応させながら当館の資料を紹介する構成であり、新規寄贈の手紙以外に、本来当館が所蔵する学童疎開関係の公文書の内容についても解説付きの映像が放映された。

また、毎日新聞は寄贈者の写真と資料の画像を複数掲載し、疎開生活の回想を詳しく伝えた。

広報チラシに利用した手紙の文章を引用して報道するメディアが多かったのは、空襲の様子や「ビー29」という単語が記されており、戦争の時代を象徴する資料であることに加え、便箋に描かれた中原淳一のイラストが見栄えすることもその理由であろう。



B29の来襲を伝える手紙

6 来館者アンケートの分析

来館者に対して行ったアンケートから、展示内容に関する感想をまとめてみたい。

年代を問わず共通した意見としては、「当時の大変さを改めて考えさせられた」、「(実際の手紙を読むことができるため)リアルな内容だった」、「リーフレットの配布がありコンパクトにまとまっているため学童疎開を実感として捉えることができた」といったものがある。実際に疎開を体験した児童の“生の声”を手紙を通じて感じることもできたという感想である。手紙のレプリカを手にとって読めるようにしたことは大変好評であり、体験型展示の一つの方法として将来的にも継続したいものである。

また、疎開を体験された世代の方からは「懐かしく昔のことを思い出した」、「戦時中に過ごした者として感動した」といった声があり、忘れられつつある戦争の記憶を伝えるための契機となったことについて肯定的な意見を頂くことができた。

一方で、「若い世代に見てもらうには、もう少し詳しい説明がほしい」という声もあった。展示スペースが狭小であったこと、準備期間が約1ヶ月と短かったといった諸条件があるにせよ、この点に関しては補助プリントや解説パネルを工夫することで解決が可能であったかも知れない。

小学生や中学生など疎開児童と同世代の観客からは「ぼくと同じくらいの子どもたちが疎開しているなんて知らなかった」、「ここにきて戦争がこんなに苦しかったことをたくさんしました」、「昔の歴史をすることができた」など、戦時下の労苦や疎開の体験を実感として捉えることができたという意見が目立ち、戦争を知らない世代に展示内容を強く印象付けるという点では成功したといえよう。

展示の構成等に関して目立った意見は「展示物の数が少ない」、「展示スペースが想像よりも小さく物足りない」というものである。東京都公文書館が展示のための施設ではないこと、また現在の公文書館が仮移転中であることから展示品数やスペースの大きさには限界がある。しかし、それら条件を差し引いても、所蔵資料を一般にも広く公開し、多くの方が見る機会を作るという意味では、今後は展示スペースの拡大や内容の更なる充実を課題としていくべきであろう。

7 総括と今後の課題

アンケートによれば、本展示をきっかけとして当館の存在を知った方は来場者の約8割にのぼった。東京都公文書館に来館される方は通常、研究や公務で公文書（史料）を閲覧することを目的としている。それゆえ、展示によって初めて知ったというのは当然であるともいえるが、本展示をきっかけとして当館の知名度は向上したといえる。

知名度の向上がすぐさま東京都公文書館の利用者増加に直結するわけではないが、当館の事業への理解を深めると共に活動についてより多くの方々に知って頂く機会となったことは間違いない。

次に、展示内容に関する課題についても確認したい。展示内容やテーマに関し、来館者の声として「一つの事例だけがクローズアップされており、学童疎開とはどういったものなのかが伝わりにくかった」というものがあった。そもそも今回の展示は、新規寄贈を受けた手紙をメインとした展示であったことから、学童疎開全般を網羅的に扱うものとはならなかったが、「子どもの見た戦争」という点では、あるいは複数の体験を比較し、疎開体験を相対化するようなアプローチの可能性もあったかも知れない。

最後に、公文書館の資料収集はどうあるべきかという重要な課題について述べておきたい。

公文書館とは、文字通り公文書の保存・整理・公開を行う施設である。そして、所蔵される資料は、設置されている自治体から移管されたものを主とする。東京都公文書館は「東京都」という母体を持つ組織アーカイブズ^{*4}であり、東京府、東京市、東京都が作成した公文書を所蔵している（江戸幕府から引継いだ文書史料も所蔵しているため、一言で表現するならば、江戸・東京のアーカイブズである）。

当館が東京都の各部局から移管される文書を所蔵する組織アーカイブズであるとはいえ、東京の歴史の全てが公文書のみで完結するわけではない。それは今回寄贈された一連の史料（手紙）からもいえることであろう。学童疎開という都の政策の“受け手”となった児童たちの声もまた、歴史における貴重な証言であり、東京の歴史の一部だからである。

それらの手紙は、当館に寄贈された（収蔵資料となった）ため、目録に登載すると共に今後恒久的に保存され、請求による閲覧が可能になる予定である。本来であれば、一般に公開される可能性のなかった史料、しかも東京都の事業として行われた学童疎開についての個人文書が公になったのは有意義なことである。

公文書館として収集すべき史料の範囲・内容については議論を重ねていく必要があるが、

「組織アーカイブズ」・「収集アーカイブズ」という枠組みにあまりにとらわれてしまっ
ては、今回のような貴重な史料を発掘する機会が失われてしまうことにもつながってしまう
であろう。

今後、ある程度は、公文書以外の個人資料を含む多様な資料の収集にも力を注いでいく
ことが求められるのではないだろうか。今回のように、公文書とオーバーラップする内容
を含むものであれば、なおさらである。

どのように資料を収集すべきか、またそうして収集した史料をいかに構成し展示という
形で社会に還元していくべきなのか、よりよい形を模索したいものである。

-
- ※1 明治11年（1878）公立馬込小学校分校として東京府荏原郡（現在の大田区北千束）に開校。翌年、荏原郡馬込村の
戸長から東京府に対して「校名唱替伺」が出され、赤松小学校と改称。明治20年（1887）には東京府令により赤松尋
常小学校と再改名。昭和16年（1941）4月の国民学校令施行に伴い、校名は赤松国民学校となった。この年、屋内体
操場（体育館）の増築や校舎の様式替えが実施されている。戦災に遭わなかったため、敗戦後に疎開から戻った児童た
ちをすぐに受け入れることができた。昭和22年（1947）、校名は大田区立赤松小学校となり、現在に至る。
- ※2 昭和9年（1934）、東京生まれ。昭和15年、赤松小学校入学。昭和19年8月より赤松国民学校の集団疎開に参加し
た。
- ※3 1900年～2001年。福島県出身。名古屋高商で経済を学んだ後、日産へ入社。日産の満洲移駐に際しては鮎川義介の
指示によって渡満、満洲重工業開発株式会社の経営合理化を推進した。一時帰国と再度の満洲駐留を経て神奈川県で軍
需会社である関東工業を設立し、終戦をむかえた。戦後は経営における合理化のコンサルタントを行う会社業務総合研
究所（現在の会社業務研究所）の所長として様々な会社の経営指導に尽力した。
- ※4 アーカイブズは、個人または組織・団体等の記録全般を指し、それを保存・整理・公開する施設のことである。ア
ーカイブズ施設は、自治体や大学といった母体を持ちそこから移管される文書等を主に管理する「組織アーカイブズ」
と、独自のテーマ・方針に従って資料の収集を行う「収集アーカイブズ」とに大別される。